

「技術遺産」としての橋

文——伊東孝 Takashi Kobayashi ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授
写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ● 土木写真家



岩国城からの市街地俯瞰景
錦帯橋のかかる錦川は大きく左に蛇行する。手前は右岸側の横山地区、左岸側は錦見地区。



ちぎり絵のような錦帯橋の夜景(上流側)
時間により、季節により、錦帯橋はさまざまな表情を見せる。ライトアップで金色に輝く錦帯橋。



元気に学校に向かう子どもたち
観光客は有料だが、地元の人たちには無料の生活橋である。車や自転車も通らないから、安全安心の橋上空間である。毎朝掃除をおこなう手前の人。

世界遺産をめざすのであれば主題の再整理や内容の大幅な見直し、構成資産の組み換えなどが必要とされるものである。

錦帯橋は、「カテゴリーI」で、しかも作業手順はa)なので、暫定一覧表入りに最も近い位置に属している。このような文化遺産は錦帯橋の他に三つある(天橋立、阿蘇、四国八十八箇所霊場と遍路道)。だが正確にいうと錦帯橋の文化遺産名称は、「錦帯橋と岩国の町割」となっている。錦帯橋という構造物だけで暫定一覧表入りをめざしているわけではない。しかしここでは、ポン・デュ・ガール(フランス)やビスカヤ橋(スペイン)のように、橋だけでも世界遺産価値のあることを提起したい。筆者も加わっている「錦帯橋を世界文化遺産にする会」では、錦帯橋の独創性と完全性を次

のようにまとめている(以下要旨)。

錦帯橋は、左右の橋脚から迫り出した桁の間に楔を入れてゆるやかな曲線をつくり、さらに重なる桁を迫り出しながらアーチを構成している。組まれた桁は、巻金といわれる帯鉄で束ねる。中央部分には、石橋の要石に相当する大棟木と小棟木を入れる。錦帯橋のアーチ・スパン三五・一は、現代工法をのぞけば木造アーチ橋としては世界最長である。

五径間のスパン割や木材の組み方、使用樹種・部位が創建時から変わっていないなど、構造の完全性が保たれている。

しかも創建時から三四〇年もの間、人から人へと技術の伝承がおこなわれ、いまなお現役の橋として機能している。このような事例は、今のところ現在そして過去にも世界中を見渡し

錦帯橋は、世界遺産暫定一覧表(以下「暫定一覧表」)には掲載されていない。しかし暫定一覧表入りをめざして、現在、鋭意検討中である。すでにわが国の暫定一覧表に記載されている一二の文化遺産に対して、鋭意検討中の文化遺産は二七件もある(うち一件は取下げ)。これら二七の案件はさらに、現在判明している価値内容に応じて、二カテゴリー・三種類に分類される。「カテゴリーI」は、わが国の文化遺産では未分野の資産で、世界遺産になりうる可能性があるが、主題や資産構成・保存管理など、今後相当な作業が見込まれるものである。この作業手順には二種類あり、地方公共団体が、a)提案書の基本的主題を基に作業を進めるもの、b)主題自体から学術的な調査研究などをきっちりに進めなければならないもの、とに分かれる。「カテゴリーII」は、わが国の文化遺産としては高い価値を有するが、現状のままではむしろかしく、



橋の見上げ

複雑な木組の様子がわかる。ヒノキ・ケヤキ・アカマツ・ヒバ・クリ・カン
の6種類の構造用木材が、木の堅さや性質に応じて使い分けられている。



左岸側錦見地区の町並み

右岸側 비해、左岸側の町並みの整備は遅れている。今後の整備とまちの活性化が待たれる。



河床の床固め
河床掘削を防ぐため、石張りが施されている。昭和二十五年のキンヤ台風による流失後、石造橋脚は、コンクリート橋脚に変えられ、表面は石張りになった。

「(以下「グローバル・ストラテジー」)が採
択された。それまでの世界遺産には、地域間・
テーマ間・文化と自然間などに不均衡が見られ
たので、グローバル・ストラテジーによって世
界遺産一覧表の代表性と信頼性を確保していく
ための各種方策が示されたのである。二〇〇八
(平成二十)年、ロンドンで開催された第三二回
世界遺産委員会では、グローバル・ストラテジ
ーの一環として「科学と技術は人類にとって重
要なものであり、科学・技術遺産を優先的に世
界遺産登録するように」との勧告文書が出され、
採択された。これに基づけば、錦帯橋を技術遺

産と位置付ける道もあることがわかる。
世界遺産登録への可否を事前に審査するイコ
モス委員の間では、アジアの木造橋を世界遺産
に推薦したいとの話がつぶやかれているという。
アジアなので、日本でも中国でもよいことにな
る。中国では風雨橋などの屋根付き橋を世界遺
産に申請する準備を着々とおこなっている。中
国に先を越されると、後から申請するときの書
き方が面倒になることは確かである。
錦帯橋は、岩国の町割をふくめても、いずれ
は世界遺産になると思うが、町割を含めると論
理展開が複雑になる。Simple is the best.」

は、政策的な判断を入れ、錦帯橋一本で世界遺
産の申請手続きを進める方が理にかなっている。
ポン・デュ・ガールのように、まず橋を登録し、
その後周辺を追加することも可能だ。
材料の真正性の問題で文化財に指定できない
のなら、稼働中の産業遺産、ないしは稼働中の
技術遺産として、内閣府で議論する筋道も考え
られる。

参考文献

- ・文化庁ホームページ <http://www.bunka.go.jp/>
- ・世界遺産委員会ホームページ
<http://whc.unesco.org/en/futureoftheconvention/>

ても存在しない(文獻的にはさらなる考証が必
要)。岩国市では近年、二回の国際シンポジウム
を開催して、アメリカ・フランス・中国から専
門家を招いて、上記のことを確認している。
世界遺産に申請するときの一番の問題は、材
料の真正性にある。国の重要文化財に指定され
るには、五〇年以上のものが対象となる。錦帯
橋は原則二〇年ごとに架け替えるので、文化財
的には真正性に欠けることになる。日本のよう
な湿潤な環境で木材を直接風雨にさらして五〇
年以上も構造材として使うのは、材質的に無理
であり、不可能に近い。民家は二〇〇〇〜三〇〇
年ももち、法隆寺は一三〇〇年というかも知れ
ない。しかしそれは、柱や梁の構造材を屋根や
壁で保護し、五〇年、一〇〇年ごとに補修を加
えているからであって、橋のように構造
材がむき出しの場合は不可能である。吹き抜け
の屋根付き橋では、五〇〜六〇年もつことを考
えると、構造材むき出しの状態がいかに苛酷で
あるのか、想像できるにちがいない。錦帯橋は、
材料の弱点を人から人への技術の伝承によって、
形を維持してきたのである。技術の伝承も、人
の一生を考えると二〇年ごとの橋の架替サイク
ルが理にかなっている。
一九九四(平成六)年、タイのプuketで
開催された第一八回世界遺産委員会で「世界遺
産一覧表における不均衡の是正および代表性・
信頼性の確保のためのグローバル・ストラテジ